



医療法人 祥佑会 藤田胃腸科病院

藤田胃腸科病院たより

第4号（藤田圭吾追悼号）

発行日：令和3年11月

〒569-0086 大阪府高槻市松原町17-36

TEL：072-671-5916

（9：00～19：00 日・祝休診）

FAX：072-661-5188



ご挨拶

理事長・院長 本郷仁志

皆様におかれましては、一段落したかに見えるとはいえ、まだまだコロナ渦の影響が残る大変な日々をお過ごしとお察しいたします。また、平素より当院が大変お世話になり有難うございます。

さて、本年5月28日、当院名誉理事長の藤田圭吾が享年93歳にて永眠いたしました。失礼ながら連絡不行き届きもあったと思われまますので、ここに改めて、生前のご厚意を感謝いたしますとともに、謹んでお知らせ申し上げます。当時はまさにコロナ禍の状況であり、家族葬の形式にて通夜ならびに葬儀を執り行い、10月には納骨式も無事に済ませました。いずれお別れの会をと考えていましたが、状況が落ち着かず叶わなかったため、ささやかながら今回の病院たよりを藤田圭吾追悼号として皆様にお届けすることにしました。

故人は、私とは義父一子のご関係ではありますが、医師として尊敬すべき師でした。多くを語りませんが、患者さんに求められるまま早朝から時間外まで、誰に対しても変わらぬ態度で診療しました。病院を、家族を、ふるさとをこよなく愛し、決して人のことを悪く言わず、誰からも好かれ尊敬される人柄でした。故人が打ち立てた「早期発見・早期治療により患者様の信頼に応える」の理念は今も藤田の根幹であり、今後も守るべき伝統と思っています。藤田圭吾亡き後も引き続き藤田胃腸科病院をよろしくお願いいたします。



藤田圭吾の生い立ち・略歴

昭和4(1929)年、和歌山県西牟婁郡にて林業を営む藤田家の姉3人妹2人の6人兄弟の長男として生まれました。幼少の頃は相撲が強くて足も速く、夏には海で遠泳や素潜りをして一日を過ごすことも多かったです。

和歌山県立田辺中学校、京都府立鴨沂高校を経て、昭和26(1951)年に京都府立医科大学に入学。部活動では水泳部に所属。昭和32(1957)年に卒業して同大学・第3内科（現、消化器内科）に入局した。その後、京都市立病院、松下電器工業健康管理室などに消化器内科医として勤務した。

趣味はゴルフ、ジム、相撲観戦。又、晩年までロータリーの活動にも精力的であった。

大阪万博が開かれた昭和45(1970)年の4月1日、高槻市に藤田胃腸科病院（病床数10床）を開院した。昭和63(1988)年医療法人祥佑会を設立。平成7(1995)年病床を33床に増やし、人間ドック健診を開始、ISO認証を取得、内視鏡センターを新設するなどして病院を発展させた。

藤田圭吾は、開院当初から、二重造影法を開発された市川平三郎先生の胃X線フィルム読影会、ならびに内視鏡検査の第一人者といわれた高田洋先生の勉強会に、20数年間通って検査手技・診断技術を学び、生涯を通じて胃腸の早期がんの発見に情熱を傾けた。

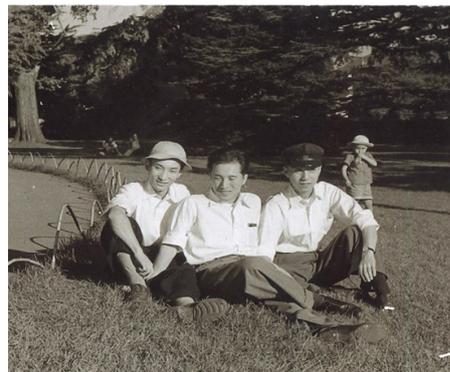




思い出の写真



両親、3人の姉と共に



友人と京都御所にて



海外出張

故郷の和歌山
県串本町の海



(現在)



木の成長を見守る

藤田胃腸科病院開院の頃



開院当時の病院

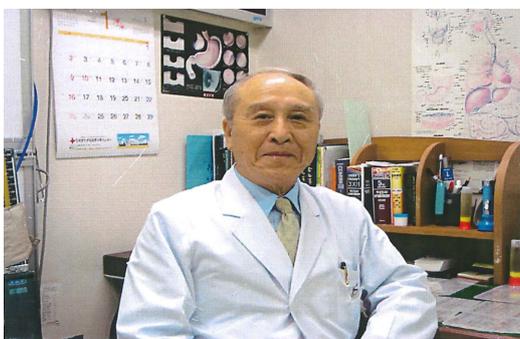




職員家族は自分の家族も同然、皆でハイキングによく行った



宴席にて



生涯現役
を貫いた



最後に参加した職員旅行



納骨の日、気持ち
良い青空が広がっ
ていた



ご冥福をお祈りし
ます 合掌



書き表わしたもの

			藤	田	圭	吾		
--	--	--	---	---	---	---	--	--

少年時代の海 (抜萃)

紀伊半島の南端に近い海辺に生まれた私は、青少年時代の夏の殆どをその荒磯の中で過ごした。変化に富んだ岩場の海の風景は、一枚の写真があれば、朝から夕まで飽くことなく思い出を語り続けることができる。

夕闇迫る海で16kgのクエと力闘して辛うじて仕止めたこと、4kgの大きな魚を仕止めたが逃げ込んだ穴から取り出せず、その裂けた内臓の臭いを嗅ぎつけたか、背丈余りの鮫が恰もゼット機のような姿で疾風の如く足許の海底を泳ぎ去って行ったこと、気象の条件に恵まれないと滅多に行けない遙か沖合の孤立する小さな島、その裾に広がる蒼い海底を悠然と泳いでいたクエの雄姿など、50年余を経ても昨日のように思い出されて、今も少年のように血が若やいでくる。これらの海は私にとっては永遠の懐かしい友である。

消化器診療 34年間の雑感 (抜萃)

1970年高槻市に胃腸病院を開院して、胃腸疾患一筋に取り組んでいる中に34年間も経ってしまった。2000年の春に念願の早期胃癌1000例を超えたので、開院以来長年に渡ってご指導頂いた国立がんセンター元院長・市川平三郎先生、癌手術で無理な注文にも応じて、見事な手術をして頂いた原田病院長・原田稔先生のご出席を頂いて、ホテル・リッツで記念会を持つことが出来た。

顧みると当時から20年余の間は、胃癌発見は専らX線検査で、自壁・市川両先生の開発発展された二重造影法によって見事に描写されたX線像は、従来のX線像と全く異なって別の世界に誘い込まれる感であった。吾々も、診断にたえる精細なX線像を撮ることに努力し、又それと共にX線像と対比する綺麗な手術標本が是非必要となり、それを得るため手術を依頼する病院の外科に何度も足を運び、主旨を説明して御協力を頂いた。この為手術を依頼する病院も、大阪医大一般消化器外科・京都府立医大第一外科・原田病院と次第に限定されていったが、実に綺麗な標本の提供を頂き続けて感謝に絶えない。これらを通じて、手術標本を大切にす外科は手術も優れているように思われてきた。

然し時代の流れと共に検査方法も次第に変化して、以前はX線が先行してその数が圧倒的に多く、内視鏡はその裏付け或は補完する形であったが、近年内視鏡それ自体の改良や、像が鮮明になり且つ撮り易くなり、又検査の苦痛も減ってきた。そのうえ初回より組織像も得られる利点もあって、一般に内視鏡検査が先行してきたと思われる。大腸内視鏡的検査数も次第に増加しつつあり、小病変の発見と共に内視鏡的切除数も更に増加してくるものと思われる。

これらの現況をみると、定期健診さえ正しく行っておれば、胃、大腸癌の早期発見率は更に高くなり、その治癒率は限りなく零に近づいてくるものと思われる。然し自覚症状の無い時の定期健診は、なかなか実行されないのが現状で、消化器疾患に携わっている医師さえも行っていないのが不思議である。私自身、半年毎に胃内視鏡検査をしていたが、数年前数ミリの微小癌を見つけ、内視鏡切除施行、3日間休養しただけで、4日目には通常勤務に戻り他人の胃を覗いていたし、3週間後には酒宴の主役を務めていた。

胃と大腸の癌 死亡零を願って (抜萃)

現在癌の診断技術、治療法も随分と進歩して、治癒率は極めて高くなってきている。皆さんの自覚次第では、死亡率零を目指すことも夢ではなくなってきました。

心得ておくべき大切な事は、1. 定期検診を必ず受ける 2. 自覚症状に頼らない 3. 検査なしで薬を勝手に服用しない(手遅れになるまで薬は効く)。その他、常々胃腸が丈夫と思っている人、頑固な人などは、病状を進ましやうい。

胃癌に対しては、年1回の定期検査(理想は半年に1回)。内視鏡が好ましいが、不可能なればバリウムによるX線検査でも可。大腸癌に対しては、初回大腸X線検査又は内視鏡検査。その結果で次の検査時期を決める。人によっては2年に1回でも可のことあり。検査の嫌いな人は、半年に1回便潜血検査(1回に2ヶ)。但し、内視鏡検査、X線検査何れも、熟練した人の手によれば精度の高くなることは世の何事につけても同じである。